博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）＿＿＿＿＿＿＿＿山越　康裕

学位申請者　山田　洋平

論　文　名　ダグール語の述部の諸相

結論

山田洋平氏から提出された学位請求論文「ダグール語の述部の諸相」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会はアジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）の山越を主査に、副査として学外からモンゴル語の文法を専門とされている東京大学専任講師梅谷博之氏、同じく学内からアジア・アフリカ言語文化研究所よりチュクチ語ならびにモンゴル語を研究し内モンゴルのチャハル方言を母語とする AA 研教授呉人徳司氏をお招きし、これに AA 研の渡辺己教授、主任指導教員である風間伸次郎教授を加えた 5 名で構成された。

論文の概要

本論文はモンゴル諸語に属するダグール語の述部の全体像に迫る記述的な文法研究である。ダグール語はモンゴル諸語の歴史を解明するうえでも極めて重要な言語であり、しかも消滅の危機に瀕している言語であって、その研究は急務である。本論文の基となるデータは、公刊されたテキスト資料と、山田氏の中国での 10 年以上にわたる現地調査によって得られたものとで構成されている。

本論文の構成は以下のようになっている。

本論第一部第一章では、本論文で扱うダグール語という言語の概要をまとめている。ダグール語はモンゴル諸語に属し、アルタイ型の言語類型を見せる。表記は 1980 年代に考案された正書法に依拠し、これを一部改変して用いたものである。

第二章では動詞の形態的特徴を記述している。動詞は典型的に節の述語を成す語類であり、本論文では動詞を動詞語幹と動詞接辞から成る語類と定義した。主節・非主節といった節のタイプを考えるために、多様な動詞接辞を機能からではなく後続しうる要素（終助詞、述語人称、所属人称接辞、格接辞）から分類した。他方で、述語複合体に関する議論において認める必要がある形動詞接辞についても、未来-gu と完了-sen の 2 種類を認めている。この他、ダグール語の動詞にまつわる要素として動詞前辞の様相を概略的にまとめている。動詞前辞は動詞の直前位置に現れる要素で、「破壊」などの様態を表すものである。

動詞前辞に動詞派生接辞を付して、自他対立のある「破壊」の意味の動詞のペアを派生することもできるし、ič_「行く」、hii_「する」などの動詞と共に用いて「破壊」の意味を表出することもできる。

本論第二部第三章では、述部の基本構造として動詞述語、名詞述語、述語複合体、否定、存在と所有について記述している。本論文における述部とは、節を構成する成分の一つであり、「項の属性や関係をあらわす」ものであると定義した。

複数の項を支配してその関係をあらわすという点からみて、典型的には動詞が述部を担うものとなる。2 つ以上の動詞が複合的に用いられ、後続する動詞が文法化して補助動詞になる補助動詞構造も盛んに用いられる。他方、名詞類も単独で述語を成すことが可能であり、補助的に存在動詞 aa_ などがコピュラとして用いられることがある。

名詞類には形容詞的な語や抽象的な意味の語も含まれ、中には動詞述語と組み合わせて、いわゆる人魚構文（動詞述語が支配する項などを維持したまま、名詞類述語に埋め込まれる形をとる構造）を成すものもある。このように動詞と動詞による補助動詞構造、名詞類に動詞が後続するコピュラ構造、動詞に名詞類が後続する人魚構文などの表現がダグール語には豊富であり、さらにこれらが複数組み合わさったり、前後にある種の不変化詞類の語などが組み合わさったりして、さらに複雑な構造を成すこともある。本論文ではこれを述語複合体と呼んでいる。

述語複合体を成す頻度の高い表現として否定がある。名詞類述語は、当該述語の後ろに否定を表す語 bišen を置いて表す。動詞述語の否定にはいくつかの方式があり、これは大まかに前置否定と後置否定に分けることができる。希求を表す接辞が付された場合には一律 buu という否定要素を、非主節においては多くの場合 ul という否定要素を動詞に先行させた前置否定となる。叙述のうち過去時制のものは基本的に uwei という語を用いた後置否定になり、非過去では基本的に ul による前置否定になるという分布が見られるが、非過去ではさらに形動詞形を要求する人魚構文型の否定表現を取ることで、進行相を否定のスコープに入れたり、説明の文脈で現れたりすることもある。

存在や所有を表す表現は、動詞述語によっても名詞類述語によっても形成される。存在動詞 aa_ は「住む」「暮らす」とも訳しうるもので、時制や相などが無標の主節においては使われにくいという性質を持っている。他方、例えば一時的な存在を表す場合には、進行相を表す補助動詞構造に aa_ を本動詞として用いた aaǰaabei などの表現が用いられる。aa_の主語は存在物である。名詞類述語で表す場合には、存在そのものを表す語 bei「ある」を用いる表現と、「～がある」という意味を表す接辞 -tii を存在物に付すという表現の 2 種類がある。存在そのものを表す語 bei は動詞接辞の付されない名詞類の語であり、主語は存在物となり、存在の場所の方が新情報として示される。-tii は存在物に付されて新情報として名詞類述語を成すもので、主語は所有者となる。これら存在や所有の否定には、もっぱら uwei「ない」という語が用いられる。この場合、存在物と所有者のいずれも主語項に取ることが可能である。

第四章では節のタイプと、主節と非主節で様相の異なる述部の現れを記述している。

主節において述部は判断のムードや働きかけのムードを表出するような形式を取り、動

詞自体は希求の形を取ったり、末尾に終助詞を取ったりする。

終助詞であると従来考えられてきた形式の中には、先行する動詞に形動詞形を要求する名詞類の語が含まれる。機能としては節を名詞的な属性叙述にはめ込むもので、判断のムードを表出する終助詞的な名詞類であり、形式としては人魚構文にあたるものである。推量の意味を表す終助詞は、やはり判断のムードと呼べるものであるが、述語人称標識よりも前に付される点が特徴的である。述語人称標識の出現位置は終助詞が持つモダリティ的意味に関して、対事的・対人的の境目の位置を占めている。

述語人称の後ろには疑問や命令の和らげなどの働きかけのムードを担う終助詞が現れる。同じく述語人称標識を有するモンゴル諸語のブリヤート語や、述語人称に準ずる要素を持つ中世モンゴル語では、疑問を表す終助詞的要素よりも後ろに述語人称 (的) 要素が現れる。おそらく述語人称標識はもともと述語複合体の一番外側に現れるものであったが、ダグール語においては疑問を表す要素が対人的モダリティを表すものとして終助詞らしさを強め、述語人称標識よりも後ろに位置するようになったものと考えられる。

終助詞や述語人称標識を伴わない動詞接辞は、時制や働きかけの意味を有さず、他の節に依存する非主節を形成する。ここでは Role and Reference Grammar (RRG) の枠組みを用いて、独立性の低さという点で主節と段階的な差を有する非主節の述部の形式について記述した。ダグール語では連位接続を担う動詞接辞が豊富であり、所属人称標識を付すことで同主語・異主語を表現するものもある。形動詞形の動詞述語は典型的には従位接続を担うが、これが連位接続を担うケースもある。等位接続は単なる節の連続に見えるが、節が述語人称を欠くことによって表現される可能性もある。

終章では、以上に要約した各章における本論文の新しい知見を整理して示すとともに、今後の課題と展望をまとめている。

審査の概要及び評価

上記のように山田洋平氏の博士論文は、きわめて多くの新しい知見を示しつつ、ダグール語の述部の全体像を示したことにまず大きな価値がある。ダグール語に関するこれまでの中心的な先行研究はほとんど中国語で書かれたものであり、その記述はもっぱら一つの方言に関するもので、しかも形態論に偏っていたきらいがある。本論文は豊富な用例を含む日本語による記述であるという点で、日本人研究者によるこの言語への今後のアクセスを容易にしたという価値も持っている。

本論文の内容に関して、各審査委員からさまざまな評価がなされた。上記の点以外で、各委員より特に高く評価されたのは、以下のような点である。

・言語類型論的な観点からみてもきわめて興味深いこの言語の述部の構造について、一連の先行研究をよく消化し、これらを踏まえた上での研究と記述を行っている。
・モンゴル諸語に属する他の言語や、さらにアルタイ諸言語全般に至る広い視野から対照言語学的考察を行っている。
・新疆の方言について十分注意を払うとともに、修士の段階からハイラル方言の調査を行

い、その後は黒竜江省にも何度も調査に出かけ、ダグール語の諸方言全体を扱っている。
・動詞前辞、補助動詞、終助詞、人魚構文など、述語複合体の諸側面を網羅的に研究し分析している。
・述語人称標識と終助詞の相対的位置について明らかにし、こうした位置と機能的な分布の関係を明確に示した。

もちろん本論文にも改善すべき点が残されている。最終試験において、審査委員からいくつかの質問、要望が出された。その指摘のうち、重要な点としては以下のようなものをあげることができる。

・人魚構文やモンゴル語の動詞前辞、存在表現における情報構造の違いなどの問題について、参照していない先行研究がある。
・本稿の中心的な成果の一つとしている「述語複合体のモデル」に関して、先行研究に対してどのような点の記述が進展したのかを明確に示していないのではないか。
・ダグール語内部の方言差について、特に古い特徴の残存やモンゴル語の影響などの観点から検討してほしかった。
・本論と補足的な記述の区別を明確にし、補足的な内容は註にして示す必要がある。
・修辞的な表現が多く、客観的に明晰な表現になっていない部分がある。
・音韻論と表記の問題が一部混同されており、その記述に問題が残る。

各委員からのこれらの指摘も、本論文の価値を高く評価した上で今後のさらなる研究の進展を期待したものであり、建設的な意見として提言を行っているものといえる。

最終試験における質疑においても、申請者の応答は的確で、委員たちとの間で学問的に興味深い議論が行われた。その過程から、申請者が指摘された問題点をよく自覚し、今後それらを解明していくのに十分な学識と強い意欲を持っていることが確認された。ダグール語文法全般の記述研究、さらにはモンゴル諸語の記述研究・対照研究・類型論的な観点からの研究に関して、申請者の今後の活躍が十分に期待できる。

審査委員会は、学位請求論文の内容、ならびに最終試験（公開審査）の結果より総合的に検討した結果、全員一致で申請者山田洋平氏の学位請求論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。